胎内回帰で2
新しい人生を！
天々座理世の子宮編

ここは木組みの家と石畳の街。
知る人は"孕みの街"とも呼んでいる。

この街で僕は条河麻耶こと、マヤちゃんと出会い、
彼女のお腹の胎内で文字通り生まれ変わらせてもらうという、
人生の転機を迎えることができた。

そんな街に再び訪れることになったのは、
マヤ(ママ)からの連絡があったからだ。

そこにはマヤ(ママ)よりも明らかに年上の女の子が一緒にいた。
その女の子の名前は天々座理世、通称リゼちゃん。
見た感じでは、十分に女の子らしいと思っていたけど、
男勝りな性格を改めて、もっと女の子らしくなりたいとのこと。

この街の女の子なら誰しもが知っている、
子供を孕んで出産する体験……
をすることによって、女らしさを身につけられるのではと思ったリゼちゃんは
マヤ(ママ)の体験した話を聞いて、知る人の信頼する人間、
つまり僕となら……
と思ったらしい。

マヤ(ママ)のために恩返しできるのならと、
僕は喜んで協力することにした。

かつて訪れた、専用の部屋に入れば、雰囲気が変わる。
女の子は母性本能が刺激され、
男の子は幼子のように母親に甘えたい本能が沸き起こる。

リゼちゃんという新しい母との出会いで、
僕は、また新しい人生の転機を迎えることとなった……

「……確かに君にはマヤの面影があるな」
「でしょー？このコなら安心して、
リゼもママになれるよー」
「不思議だ……この部屋に来るまでは
男子の前で裸になるなんて
考えられなかったのに……
今は、母親になれると思うと、
そんなことは些末なことに思えるんだ♡」
「リゼのほうは準備オッケーだね！
ほらほらぁ……
坊やも準備しようね♡」

ママの胎内(なか)に回帰するために、
まずは赤ちゃんとして出てくるところを
入りやすくするところから。
「んちゅっ……んっ、レロっ！」
「あ……ひゃあっんっ！流石に……
いきなり舐められるのは！
んんっ♡」
寝転がって足を開いたリゼちゃんの
秘部に舌を這わせる。

「あはっ！
初めてでも気持ちいいよね！
坊やをお迎えする身体に
なってきてるんだよ～♡」

「そ、その変化は……
感じていたけどおっ！！
はあっ！ンっ♡
こんなに気持ちっ！
いい、なん……てえっ♡」

杞憂だったけど、
この様子ならすぐにでも
胎内(なか)に向かえるだろう……

「はうっ　し、舌がっ　な、中にィっ！？」
舌が処女膜を押し広げ、
膣の内部に入り込む。
「舌が入ってきたほうが、
胎内(なか)に"来て"るのがわかるでしょ？」
「あっ……ああ！　胎内(なか)に……
流れっ、込んできてるっ……ふうウンッ♡
溜まってきてる……」

肌と肌で触れ合っていただけでも、
自分の体から、わずかに何かが
吸い取られて、
胎内に向かっているような感覚はあった。
けど、粘膜同士での接触は
それがはっきりわかるほど
強くなったのがわかる。

「すごいでしょ～
粘膜がくっつく面積が大きいほど、
早くって気持ちよ～く
お迎えできるよ♡」

チュプ

「わ、私からもさせてくれ……
さすがに母親が息子にされてばかりというのもな」

「じゃあ、ふたりとも一旦離れて――……
坊やはベッドの上で仰向け！
リゼはその上に乗って！」

「ん、わかった……」

　ベッドの上で仰向けになった
僕にまたがって、
リゼちゃんが足を開く。

「接触が大きいとなると、
やはりこれが最適なのか……」

「そうだよ～
さあ、おチンチンを持って、
あそこに入れちゃおっ♡」

「よしっ！……
んっ！」

ペニスを掴むと
熱く湿り気を帯びた膣口に
先端をあてがう。

「うっ……！」
「はっ……あンっ♡
こ、これがセックスぅ……んっ！」

そのまま抵抗もなく
ずぶずぶとペニスは
膣内へ潜り込んでいった。

「んっ……はぁ、ン……♡
これが……セックスなのか……」

甘い吐息がリゼちゃんの
口から漏れる。

「あっ……わかるぞ！
君が私の胎内へと
流れこんでっ……
くるぅ♡」

「うあっ……はああっ！」

ぴったりとペニスに密着した
膣壁は射精をしてもいないのに、
僕自身を吐き出させ
子宮に飲み込んでいく。

「ハア……こんなにっ
気持ちよくなってえ……
赤ちゃんまで
お迎えできるなんてっ♡」

自ら腰を振り、ペニスを
奥深くにぐいぐい
飲み込んでいく。

「あっ……ママぁ♡」

ママ
だんだんとリゼちゃん
との間に結びつきが
できるのを感じていた。

「んもうっ！私もいるんだぞっ！
二人だけでイチャイチャ禁止っ！！」

「あっ……マヤっ！　こ、こらぁ♡」
「んっ♡　あっ……ママぁ」

マヤ(ママ)が結合部分をペロペロと舐める。
さらに根本からペニスを
掴んでゴシゴシとシゴいて射精を促していく。

「んっ！　ああっ……
で、出ちゃいそうだよぉ！」

思い出したかのように射精感が
ペニスにこみ上げてきた。

「うふふっ～おチンチンがビクビクしてるっ♡
ほーらぁ、精子が出そうになってるよ～♡」

「い、今でも十分気持ちよくって　んっ♡
限界なのにぃ……はううっン♡
ま、まだなにか……来るのかぁっ？」

リゼ(ママ)もペニスの律動を膣内で感じていた。

ビクッ
ビクン！

「んんっ！！で、出ちゃうよおっ！！」
マヤの手コキにこらえきれずに
僕は簡単に達してしまった。

「あはっ！精子出てる～♡」

身体全体が流れ込んでいく感覚と
渾然一体となって、熱いほとばしりが
子宮を目指して駆け上っていく。

「あっ！はああんっ……あ、熱いのがぁ……
どぴゅどぴゅ私の胎内にっ！」

「いっぱい出したね～
溢れてきてるよ♡」

マヤは結合部分の隙間から
溢れ出た精子をペロッと舐め取っていた。

「ああっ……まだ
で、でてるうう♡　ンっ！はぁぁん♡」

リゼは身体を震わせて、出続ける
熱いほとばしりをしっかり受け止めてくれた。

「ママあっ……！」
たまらなく愛しい気持ちになって
僕はリゼ（ママ）の上半身を
引き寄せると、そのまま口唇を重ねた。
「あ、はぁんっ……キスぅ♡
はじめてを、また息子とぉ♡」
リゼ（ママ）の体重が僕に乗っかっている
包み込まれているような感覚で
安心感を与えてくれる。
「ンッ……」
舌を口の中へと這わせる。
「ンむっ……はむぅ……♡」
リゼ（ママ）は抵抗もなく
舌と舌をからませてきてくれた。
ハァ
ハッ
ヌッ
ヌプッ

トプン
トプン
おほぉ
「ンふぅ♡
入って……きてるぅ♡
下からも　上からもぉ
体の真ん中にっ……！」
「んっ……ママの胎内に……
吸い込まれていくよっ♡」
口の中の粘膜接触も
増えたからだろう
ママ
リゼの胎内に入っていく
につれて一体感が増し、結びつきも
強くなっていく。
「ああっ……どんどん入ってきてぇ　ンンー
いっぱいになるぅ♡
子宮がいっぱいになってきてるぅ……ンっ♡」

「リゼのお腹、だいぶ大きくなってきたね～！」

「そ、そうか？　ああっ……　んっ♡」

　お腹の膨らみが存在感を増し始め、
密着しきれなくなったと感じた
僕たちはぴったり抱き合うのをやめ、
体を起こした。

「ほ、本当だっ！　すごいな……」

　リゼ（ママ）のお腹はなだらかな
曲線を描いていた。

「坊やもずいぶんと
小さくなってきてるねー！」

　僕の背も大分
小さくなってきていて、
ちょうど目の前に来た
大きな膨らみに
自然に口が
吸い付いていた。

「あンっ！
こ、こらぁ　いきなり
吸っちゃぁ♡　はぁン！」

「おっぱい……んま　んま……」

「がんばれ、がんばれ～っ♡
もう少しでリゼの胎内に帰れるよっ！」

「はあっ……
もう少しでママになれるのだな
本当に楽しみだ……」

「ふむっ……んちゅう」

「今は出ていないけど、
君を生んだら、
そのときは
好きなだけ飲ませて
あげるからな♡」

「ほーら……
あともうちょっとだ……
がんばれっ！
せーんぶ私の中に、
ママの胎内(なか)に帰ってこい♡」

すでに僕の身体の
大部分はリゼ(ママ)の中だった。

「はあっ……んっ！」
身体は、
幼児といっても
差し支えないほどの
大きさにまで縮んでいた。

もはや全身の感覚も
はっきりしなくなっている。

それでも、ただ一点、
集中すると
はっきりしている
ところがある。

僕の意識は
そこに
移っていった……

僕の身体を取り囲む壁。
先にきゅっとすぼまった
小さな点のような穴が見える。
僕は子宮の入り口を目指し、
膣の中を一心不乱に進む。

膣内は十分に暖かくて
心地よいけど
この小さな穴の奥には
もっと安心して休まる空間
が待っていることを知っている。

僕がだんだん近づくにつれて、
穴は大きくなってくる……
いや、僕の体が小さくなってきて
いるんだ……穴に密着する頃には
僕の身体は小さい穴にすっぽり
吸い込まれるくらいにまで縮んでいた。

「あっ……なんだろ……」

ちょっとした違和感。入る前、一瞬感じた、存在感……
まるで誰かがもういるみたいな……

一体誰だろう……と思うも、ほどなくして
穴に吸い込まれて、一旦僕は意識を手放した……

「完全に、私の胎内に
入ってしまったな……♡」

いま完全に僕の姿形は消滅して、
代わりにお腹を
ぽっこりと膨らませたリゼが、

「あっ……わかるぞ
私の中で生まれ
変わっているのが
私の一部を取り込んでっ……
成長しているのが♡」
と、

ポッ

ポッ

リゼ(ママ)の遺伝子をもらって
生まれ変わっている最中の、
急激にお腹の中で
成長していく僕を
感じ取っていた。

「うわぁ……どんどんお腹が
大きくなってきてる～」

「んっ……動いてる……
私のお腹の中で新しい命が
育まれている♡」

「ふうっ……はあ！
さすがに人一人が
お腹の中に居ると
重いな♡」
時間を経て、
リゼ(ママ)のお腹はすっかり
出産の一歩手前という膨らみに
まで成長していた。
「んふふー赤ちゃんが
出たがってるね……
おっぱいからミルク
の匂いしてきたよ～♡」
「さすがに
緊張するな……
しかし、お腹はこんなに
大きくなるものなのか？」
「私のときよりも
大きい気がするけど、
こんなものじゃないかなー？」
「そう……なのか？
なら、大丈夫か……
！！！はぁあっ
おなかの中で……
移動してきてるっ！？
赤ちゃんが下にっ
……んんっ！
降りてきてるのが
感じられるっ！！」
僕の身体は本能的に
出口を求め、
産道を通っていった。

「あっ……はぁぁ！
あそこ広がっ、んんん♡」

「頭がお外に出てきたよ～」

「はぁンっ！！
な、中を
ぐりぐりしながらあっ！！
だめえっ
んっくうう♡」

出やすいように
身体は回転しながら
外に向かう。

「あ、おっぱい
染み出してきたぁ♡
もうちょっとだね！
ふたりとも頑張れっ♡」

「だめっ……！！
気持ちっいいっ！
はぁぁン♡」

ミチッ

ミチッ

「イっくぅ！
出産しながらっ！
イっちゃうぅ♡
ンっ！　ぐっ！
ふぅぅ！！」
ビクビクっと
身体を震わせ、
いきみ続ける。
「赤ちゃんのぐりぐりでぇ
ンっ！！気持ち……
よくなっちゃうのぉっ！！」
めいいっぱい広げられた
膣口から
僕の身体はずるずると
外に吐き出されていく。
「はぁっ！！あああんっ♡」
「ほらぁ出てきたよ～♡」
僕は再び新しいママの
胎内から
この世界に生まれ落ちた。
ずるっ
ずるっ

「お……ほっ
おおおっ！
ンンン～♡♡」
僕の身体は完全に
ママの胎内から外に出た。
「あっはぁ……
で、出たぁ！
私の胎内からっ
赤ちゃんがぁっ♡」
「そうだよ～
しーっかり、へその緒で
リゼと赤ちゃん
つながってるよ！」
「私っ……
ママになったんだな……♡」

「はぁ　はぁぁ……
これが赤ちゃんの重さか……
お腹にいた時とはちがった
心地よい重さだな♡」
「あはっ！やっぱり
生まれたばっかりって
かわい～♡」
お腹の胎内での無重力空間の
ようなふわふわした
心地よさはもうないけど
温かい手で抱きかかえられて
肌の体温を感じているのも
悪くはない。
「まだお腹が膨らんだ
ままなんだが……
いったいどれくらいで
もとに戻るんだ？」
「あ、それはねー
おっぱいをあげていれば、
どんどん赤ちゃんに
戻っていくよ～」
「そういうことなのか……
マヤもうれしそうだな」
「リゼが新しく
ママになったけど、
私だってママ
じゃなくなった
わけじゃないんだからね！」
「そういえば……
それもそうだな！」

「ふふっ……
おっぱいを飲ませたら、
すぐに大きくなってきたな……」
「んくっ……んっ　ママ♡」
ママの母乳を飲んで、僕はもとの
身体の大きさに戻ろうとしている。
「あせらなくていいぞ……ふふ……
息子が懸命に母乳を飲む姿は
かわいいものだな♡」
「あれ？リゼのあそこ、
まだヒクヒクしてる？」
「んっ？……そういえば、
なんだかお腹が……
まだでてきそうな……」
お腹の中で感じた
僕以外の存在……
それが今まさに明らかに
なろうとしている。

「あっ、赤ちゃんの頭がみえてきたっ！
すっごく広がってきてる～♡
あなたは一体だれなのかなっ？」
「えっ！？　ま、まだ私の胎内にいるのか？
あっ……指先にっ！
赤ちゃんの頭が……
んんっ！！　はぁあっ出るっ！」
「あっ……そっか！さっきの射精で、
きっと受精してたんだよ～！」
「んはっ……はぁあっ！
ま、まさかそんな……
そんなことがっ！
はぁンっ！ある……のか？」
「普通なら時間がかかるけど、
この妊娠出産体験の影響を受けて
生まれることができるまでに
一気に成長したんじゃないのかな～？」
「周期を考えたら、確かに
妊娠する可能性は……あっ！！
たけどぉ……
受精した赤ちゃんも
できてたっ！！　なんてぇ♡
あああっ！！！」
「坊やとリゼの赤ちゃんだね～♡」

「んふっ……ふあっ
で、出るう
気持ちっ……イっ！
はぁあっ♡」

「するする～って、出てきたぁ♡
一度出産して、
産道が広がっているから、
すぐに出て来られたんだね～♡」

「んっ……ハァああンっ！
おっぱいそんなにい……
吸っちゃだっ
めぇぇ♡」

「んっ……こくこくっ」

マイペースに僕がママからの
母乳を一生懸命
飲んでいるうちに、
どうやら出産はすぐに
済んでしまったようだ。

あっ
ぴゅー
おぉっ
ぴゅ
ズズッ
ズルッ！

「わあっ……女の子だぁ♡
かわいいよっ！」
「そ、そうなのか？
わ、私にも……
早くみせてくれないか？」
「うん……まっててねぇ
いまきれいに拭いてあげるから……」
「まったく……
君はパパになった
自覚があるのかな？
おっぱいにずーっと
吸い付いたままで♡」
「うー……コクン♡」
もとの自分の体の大きさに戻るまで
まだまだおっぱいを吸い足りない。
この手でしっかり
赤ちゃんを抱きしめて
あげるためにも、
いまはもとの大きさに戻らないと……

「ふう……まさか子供がいっぺんに
二人もできてしまうなんてな……」
しかも、その子同士がまた親子……
親父になんて説明しようか……」

「部屋の中を探したら、赤ちゃん用の服が あったよ！
きっと、こういうことってよくあるんだよ～」

「体験した人同士がよく、
一緒になる場合が多いのは、
こういう理由が
あったからなんだねっ！」

「んっ……」

二人のママ
僕はいま、マヤとリゼの子であると同時に
3人に囲まれて心地よさそうに眠っている
この女の子のパパでもあるんだ……

「こほんっ！君も男だ！
そして私の息子でもある……
なら、このあと
どう責任を取れば良いのか
わかってるな？」

「ふえ？」

「リゼのお婿さんになるんなら、
いつでも会えるよね～
ママとしては嬉しいなっ♡」

ここで責任をとらなければ
男じゃない……
パパとしても息子としても……
迷いなく僕は返事をした。
「ママ、ぼくと結婚してください！」

「わかった……！
今後とも、末永く
よろしく頼むぞ♡」

この街に来て、僕にはまた、
大きな人生の転機が訪れた。

「ああ……そういえば
親父になんて
言おうか……
いや、大丈夫だ！ちょっと、
軍人として厳しいところも
あるがきっと……
わかってくれるさ！」

「う、うん……」
……新たな人生の第一歩は
お義父さんの説得から
頑張ろうって思う。

～FIN～